



Title	Trends in Sudden Cardiac Death and Its Risk Factors in Japan from 1981 to 2005 : The Circulatory Risk in Communities Study
Author(s)	丸山, 皆子
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59017
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【40】

氏 名	まるやまみなこ丸山 皆子
博士の専攻分野の名称	博 士 (医学)
学 位 記 番 号	第 2 5 0 8 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科予防環境医学専攻
学 位 論 文 名	Trends in Sudden Cardiac Death and Its Risk Factors in Japan from 1981 to 2005: The Circulatory Risk in Communities Study (CIRCS) (心臓突然死発症率の推移とその要因に関する研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 磯 博康 (副査) 教 授 的 場 梁次 教 授 小 室 一成

論 文 内 容 の 要 旨

〔 目 的 〕

わが国の心臓突然死発症数は、年間約3万人と推定されており、心臓突然死の約25%は虚血性心疾患が原疾患と考えられている。米国では、年間約30～40万人が心臓突然死すると推測されており、全心臓死の50%を超えている。近年、わが国における都市部の男性において、虚血性心疾患の発症率が増加傾向にあり、心臓突然死も増加することが予測される。しかしながら、地域住民を対象とした、長期間にわたる心臓突然死発症率とその要因に関する研究はこれまでにない。本研究では、長期間循環器疾患の疫学調査を実施している一般地域住民を対象とした、心臓突然死発症率の推移とその危険因子の推移について検討した。

〔 方法ならびに成績 〕

長期間疫学調査を実施してきた4地域（人口約60,000人）の30～84歳男女において、1981年～2005年までの心臓突然死の悉皆調査を行い、その推移を検討した。心臓突然死の定義は、急性症状から1時間以内に死亡、また24時間以内は症状もなく生存していたが死亡した場合（脳血管疾患、悪性腫瘍、事故など、心臓死以外の死亡原因が考えられるものを除外）とした。5期間（1981～1985年、1986～1990年、1991～1995年、1996～2000年、2001～2005年）に分けて心臓突然死発症率の推移を検討した。解析は、男女別、年齢層別（30～64歳、65～74歳、75～84歳）に分けて実施し、「昭和60年モデル人口」を基準人口として、直接法による、年齢調整心臓突然死発症率を算出した。さらに、虚血性心疾患有無別、発症から死亡までの時間別（1時間以内・1～24時間以内）、死亡場所別（行院内・病院外）に分け、心臓突然死発症率を算出した。その結果、471名の心臓突然死発症者（30～84歳）が確定された。発症率は、1995年までは低下傾向が認められたが、1996年以降漸増傾向に転じた。また、男性および年齢が高い程発症率が高かった。虚血性心疾患による心臓突然死は、虚血性心疾患以外より少なく全発症者の25%であり、発症率の推移は、心臓突然死発症率と同様の傾向がみられた。発症から死亡までの時間別では、1時間以内の発症数は、1～24時間以内のそれより

少ないが、発症率の推移は、全心臓突然死と同じ傾向が見られた。

4地域における循環器危険因子の推移を、同地域の1981年～2005年までの検診結果を用いて分析し、心臓突然死に対する循環器疾患危険因子の影響について推察する。結果、高血圧有病率は、男女ともに1995年までは低下傾向が認められたが、1995年以降その傾向は認められず明らかな変化はなかった。これは、心臓突然死発症率の推移と同様の傾向であった。男性における現在喫煙者の割合は、1981年から減少し続けている。糖尿病有病率は、男女ともに1981年から増加傾向が認められた。BMIおよび肥満者の割合は、男性では増加傾向が認められた一方、女性では、減少し続けていた。

〔 総 括 〕

わが国の心臓突然死発症率は、1981年～1995年までは低下傾向が認められたが、1995年以降その傾向は認められず明らかな変化はなかった。糖尿病有病率が増加傾向にあるため、わが国における、心臓突然死発症率が今後増加に転じる可能性も考えられる。したがって、今後もこのような調査を継続することが重要である。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

わが国では、一般地域住民を対象とした、長期にわたる心臓突然死発症率の推移を分析した疫学研究はこれまでにない。本研究では、一般地域住民（総人口60,000人）の30～84歳における、1981年から2005年までの心臓突然死発症率並びにその危険因子の推移を分析した。

その結果、25年間で471名の心臓突然死発症者が確定された。発症率は、1995年までは低下傾向がみられたが、1996年以降その傾向はみられなかった。また、総じて男性および高齢者では発症率が高かった。危険因子の推移に関しては、高血圧有病率は男女ともに1995年まで低下傾向がみられたが、1996年以降その傾向はみられなかった。糖尿病有病率は、男女ともに1981年から増加傾向が認められた。

高血圧有病率の低下が停滞し、糖尿病有病率が増加傾向にあることから、今後わが国の心臓突然死発症率が増加に転じる可能性が考えられ、本研究は今後の循環器疾患対策の方向性を議論する上で重要なエビデンスを提供したものと言える。また地域一般住民における心臓突然死の推移の把握や今後の予測のため、継続的な疫学研究の重要性も示した。従って、本研究は学位の授与に値すると考えられる。